

II. 特 別 講 演

「全身性骨疾患の X 線診断」

那須中央病院放射線科部長

西 村 玄 先生

第44回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成11年12月11日(土)

15:00~18:00

会 場 新潟グラウンドホテル

常磐の間

I. 一 般 演 題

1) 当院における虚血性大腸炎の検討

高久 秀哉・小林 孝(新潟臨港総合病院)
 松尾 仁之・三輪 浩次(外科)
 林 俊彦・本山 展隆
 鈴木 裕・大塚 和朗(同 内科)
 山田 聡志 (新潟大学)
 (第一病理)

虚血性大腸炎の臨床病理学的特徴を明らかにすることを目的に以下の検討を行った。

【対象】1996年から1999年5月までに虚血性大腸炎と診断された26例。【検討項目】年齢、性別、既往歴、症状、発症時刻、発生部位、内視鏡像の時期的変化、治療方法、再発例。【まとめ】高齢の女性に多かった。腹部の手術歴を10例に認めた。S状結腸に病変をもつものが多かった。臨床的、内視鏡的に約10日で軽快する軽症例が多く、手術が施行された症例はなかった。腹痛+下痢+血便を訴える症例が多かったが、腹痛のみ、便潜血反応陽性のみで発見される症例も存在した。再発例は2例存在し、うち1例は5回の再発を認めた。

2) 大腸顆粒細胞腫症例の検討

船越 和博・斎藤 征史
 佐藤浩一郎・小堺 郁夫
 秋山 修宏・加藤 俊幸(県立がんセンター)
 小越 和栄 (新潟病院内科)
 太田 玉紀 (同 病理)

当院にて経験した大腸顆粒細胞腫症例は3例あり、平均52.6歳、男性2例、女性1例であった。3例とも黄色調で半球状および臼歯状の粘膜下腫瘍の内視鏡形態をとり、1例は横行結腸に7mm大の病変を2つ、他は上行結腸および下行結腸にそれぞれ7mm、8mm大の単発病変を認めた。3例、4病変とも内視鏡切除が施行された。組織学的に粘膜下層に紡錘型の腫瘍細胞が胞巣状に配列し、顆粒細胞腫の組織像で、悪性の所見はなく、免疫組織化学染色ではS-100蛋白陽性であった。顆粒細胞腫は神経原生細胞由来と考えられている希な腫瘍であるが、大腸から発生した症例の報告も近年、増えつつある。本邦報告例35例を加え、文献の考察を加え報告した。

3) Crohn病と鑑別を要した難治性複雑痔瘻と盲腸憩室炎の一例

石川 裕之・遠藤 和彦
 木村 愛彦・藤田みちよ(秋田組合総合病院)
 小杉 伸一・竹石 利之(外科)

症例は33歳女性。現病歴：平成10年11月頃より、3時方向の肛門部痛が出現、平成11年4月頃より、背部痛や両膝関節痛が出現した。7月23日、右下腹部痛がみられ、その後、熱発も続き、8月12日当科を初診した。炎症反応も著明で、Crohn病の急性期も疑い、当科に入院となった。入院後禁食として、中心静脈栄養管理として、精査を進めた。注腸造影では、盲腸に憩室の多発を認めた。21日に肛門周囲膿瘍を切開排膿したが、39℃前後の熱発が続き、25日に腹部CT施行、右骨盤腔に膿瘍を認め、同日回盲部切除、ドレナージを行った。術中CFでは、縦走潰瘍も数石像も認めず、組織診断も憩室炎の穿孔だった。術後経過良好で、10月29日退院となった。